

多文化間精神医学

多文化間精神医学は「心」と「文化」の関わりを探求する学問であり、また臨床的活動である。世界的には、クレッペリンが早発性痴呆（精神分裂病）と躁鬱病の普遍性を調べるためにジャワに旅したことがその始まりとされるが、精神病理の地域的多様性については古来より長く関心を持たれてきた。日本においても多文化間精神医学会の設立は1993年と最近だが、比較精神医学等の名のもとで研究はずっと以前から行われてきた。

多文化間精神医学の具体的な研究内容としては、以下のようなものがあげられる（野田文隆「これからのわが国における多文化間精神医学のあり方」こころと文化 1.1.10-15, 2002）。

- 1) 世界の異なる文化において精神的病態や有病率、治療形態、回復経過等がいかに異なるかについての疫学的比較や民族誌的研究
- 2) 文化間の葛藤や異文化適応についての研究（とくに移民や難民、避難民、外国人労働者、留学生、国際結婚のカップル、帰国子女、旧植民地国出身者などが対象となる）
- 3) 憑依現象やシャーマニズムなど、地域固有な宗教的・文化的現象の研究
- 4) 精神医学の理論と実践を文化的構成物として批判的にみていく研究

これをみるだけでも、グローバリゼーションが大きく関わってくる領域であることがわかる。が、多文化間精神医学において「グローバリゼーションとは何か」という問いが明確に問われてきたわけではない。むしろ、グローバリゼーションの流れを所与のものとして捉え、それがもたらす影響について考察したものが多い。

Transcultural Psychiatry 誌の編集長であるカーマイヤーは、グローバリゼーションが精神医療にもたらす影響を以下の3つに整理している（カーマイヤー・L「文化精神医学の将来」こころと文化 1.1.39-54, 2002）。

- 1) 精神医学的障害と相互関係にある、個人的および集団的アイデンティティの形式と共同体の生活に与える変化
 - 2) 経済的不平等が精神保健に与える影響
 - 3) 精神医学の知それ自体が形成され、普及することによる影響。
- そこから逆に、グローバリゼーションをがどのように捉えられているかみてみよう。

1) ではグローバリゼーションの具体的内容として、世界規模での人の移動の増加と、マスメディアや電気通信による情報網の世界化があげられ、文化は「グローバル・システムの流れにおけるローカルな渦巻きのようなもの」として捉え直される。地球上の多くの人々は貧困や移動が容易でないためにローカルな世界の価値観に従って生活し続ける。グローバリゼーションの圧力自体が逆に人々に独自のエスニック・アイデンティティを主張させるため、人々のアイデンティティや生き方は均質化しないという。そして、個々人は自己評価や

社会的援助や、差別に対抗する力をコミュニティから得ることが多く、そのコミュニティを維持する絆を生み出すのはエスニックアイデンティティなので、政治的体制がそれらにどう影響を与えたり寛容さを育てているかに多文化間精神医学は関心を寄せるべきだという。

1) に関しては、クレオール化という視点からの議論もある。クレオール化する世界では、多重帰属、多元的参照枠組み、多地域コミュニケーション、長距離間ネットワークなどの現象が一般化し、意味の表象システム(言語、集団的儀礼など)はもともと閉じたものではなかったにせよ、ますます多元的で流動的になる。しかし、そのように内的統一性をもたないシステムの中で、人々のアイデンティティがどう形成されていくかはまだ十分知られておらず、今後の重要な課題となる。また、意味のシステムにおける多元性やパラドックスや不規則性は、特定の地域の社会制度や、マクロなレベルでのグローバル化や政治経済による覇権争いと有機的に結びついているため、「文化」「表象」「構造」「アイデンティティ」といった鍵概念を再考した上で、世界的状況とローカルな出来事とのつながり、文化と社会制度の関係性をみていくことが求められる(Bibeau G "Cultural Psychiatry in a Creolizing World." *Transcultural Psychiatry* 34.1.9-41, 1997)。

2) では、国境を越えた消費資本主義が世界中で経済格差を広げ、精神保健上大きな悪影響をもたらしているという Desjarlais R et al.: *World Mental Health*. Oxford University Press, NY 1995 においても、精神病や精神的苦悩は貧困や経済格差、開発、戦争、政情不安といった社会的要因と密接に関連していること、途上国に高率に精神医学的問題が存在し人々の生活の大きな重荷になっていること、従って精神保健が公衆衛生の優先課題とされるべきこと、などが指摘される。

一方3) では、精神医学そのものが個人や家族にのみ焦点を当てがちであり、また生物学的精神医学が優勢なため、上記のような政治的経済的問題を個人の問題に還元しようとする勢力に取り込まれてしまう危険性があること、多国籍企業のマーケティング戦略によって専門家が自律を喪失し、たとえば途上国において精神医学の教育や研究の多くが製薬会社のスポンサーのもとで行われていることなどが指摘される。このほか、米国の精神疾患診断体系が世界標準化されていくことの危険性や、数値化されないものが「エビデンス・ベースト・メディスン」の名のもとで軽視されていく可能性、インパクトファクターなどの指標が研究者たちの動機付けや研究資金の流れにもたらす影響など、科学社会学的な視点から精神医学を観察することの重要性が指摘されている。

以上、多文化間精神医学がグローバリゼーションのどのような側面に注目してきたかを見てみたが、これまで多文化間精神医学で蓄積されてきた知識が、グローバリゼーションのもたらす問題に対処していく上での有用性もそこからみえてくるかもしれない。例えば移住者については、移住前、移住過程、移住後の各段階においてどのような社会的条件がメンタルヘルスに良好に作用するのかが既に詳細に研究され、カナダでは政策に活かされている。ま

た、異文化葛藤や宗教精神医学の視点は、異質な者同士がどう相互理解しあうかとも関わっており、民族対立や宗教的対立の緩和や紛争予防、紛争後の和解や平和構築への糸口を提供しうる可能性もある。このほか、近年急速に発展しつつあるトラウマ研究も多文化間精神医学視点と交差させることによって、植民地支配の傷跡がようやく言語化されるようになったポストコロニアルな状態と、グローバリゼーションによるネオコロニアルな状態の混在する世界を読み解く上で重要になってくるであろう。